

わが国におけるウォーターフロント開発の歴史の変遷に関する研究
- 明治期の江戸東京のウォーターフロントにおける空間構成について -
A Study on Historical Changes of the Waterfront Development in Our Country
- About the Space Composition of Waterfront in Edo/Tokyo of the Meiji Era -

神宮字良太**・横内憲久***・岡田智秀***

By Ryota JINGUJI**・Norihiya YOKOUCHI***・Tomohide OKADA***

1. 研究目的

水辺空間が都市景観形成、都市環境整備という視点から注目を集めている近年、ウォーターフロント(以下:「WF」)開発が各地で展開され、都市生活者に快適な空間を提供するとともに、まちづくり戦略においても重要な空間として位置づけられつつある。水辺のまちづくりは長い歴史を有しており、このため、こうしたWF開発を思案するうえでは、これまでWFが都市において担った機能や役割を捉えることが重要と考える。

そこで本研究では、わが国のWFがまちづくりの中で担ってきた機能や役割を歴史の変遷の中から明らかにするため、鎖国が解かれ、封建的な因習・様式から民主的・合理的すなわち現在の社会構造へと時代が変貌し始める明治期(1868～1911年)の江戸東京の水辺空間⁽¹⁾を対象とし、その時代におけるWFの空間構成を明らかにすることを目的とする。

その調査方法としては、明治期全44年間におけるWFの空間構成を捉えるために、史料や文献^{(1)～(51)}を用い、江戸末期(1860年頃)から明治期における江戸東京の水辺空間の土地利用や立地施設およびそれらの空間的位置等の変化状況について分析を行う。

2. 明治期のWFの機能および空間構成

表-1は、史料・文献^{(1)～(51)}に基づき明治期のWFにおいて現出した立地施設や利用形態を時系列で機能ごとに示したものである。これより、空間に大きな変容がみられた時期として明治期全44年を3

期に区分した。この表-1で示す各期の機能の空間的位置を表したものが図-1である。

以降では、表-1および図-1に基づき各期の特徴をそれぞれ述べていく。

(1)土地利用転換期(1868～1872年頃)

この期は鉄道が敷設されるまでの5年足らずであったが、WFの「機能」について示した8項目のうち6項目において、それぞれ新たな機能が現出していることがわかる(表-1)。

例えば、WFは「軍事」の機能として「軍用地」の立地場所であった⁽²⁾。こうした広大な土地は武家屋敷やその跡地を国有地として接収することにより確保された。つまり、当時のWFでは江戸幕府から明治政府への転換を契機に、富国強兵という国是のもとに、「武家地⁽⁵²⁾」から「軍用地」へと、防衛の機能としては同様の土地利用転換が促されたのである。

また、1853年のペリー来航を契機として、鎖国が解かれた1868年頃のWFには、「外国人居留地」をはじめ、諸外国との通商のための施設が次々に開設された。さらに周辺には、外国人向けの施設が建設され、その中でも和洋折衷の建築様式である「築地ホテル館」は多くの錦絵に描かれ、当時の東京の新名所となった⁽⁵³⁾。建築物自体が名所として愛でられた要因としては、見通しがよい(天空率が高い)という空間的特徴を有する水辺に立地することで視対象である建築物が際立ち、より印象的に眺められたためと考える。

以上のような多様な土地利用転換が促進された時期の空間分布状況を示した図-1をみると、各機能は隅田川河口付近から品川方面の海岸線沿いに分散しており、特定の機能が集積している空間はみられない。

これらより、この期のWFは軍事力を高めるため、また新しい文化を受け入れる空間として土地利用転換が促進されたが、その空間分布は広範に機能が分散する状況にあり、明治期に新たに現出した機能と

* キーワーズ: 土木史、景観、空間構成

** 学生会員、日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻

*** 正会員、工博、日本大学理工学部海洋建築工学科

しては地域の特色は特にみられない時期であった。

(2) 都心拡充期(1872~1891年頃)

1872(M5)年にわが国で初めての鉄道として「新橋・横浜間」が開通した。この鉄道は付近の軍用地を避けることや横浜に居留する外国人の陸域からの侵入を防ぐために、品川付近から海上に突き出し、海岸線に沿って設置された⁵⁴⁾(図-2)。これは水域に当該施設を設置することでそれ自身が周辺にもたらす害の影響を物理的に回避するという水域が有する完結性が活用されたといえよう。

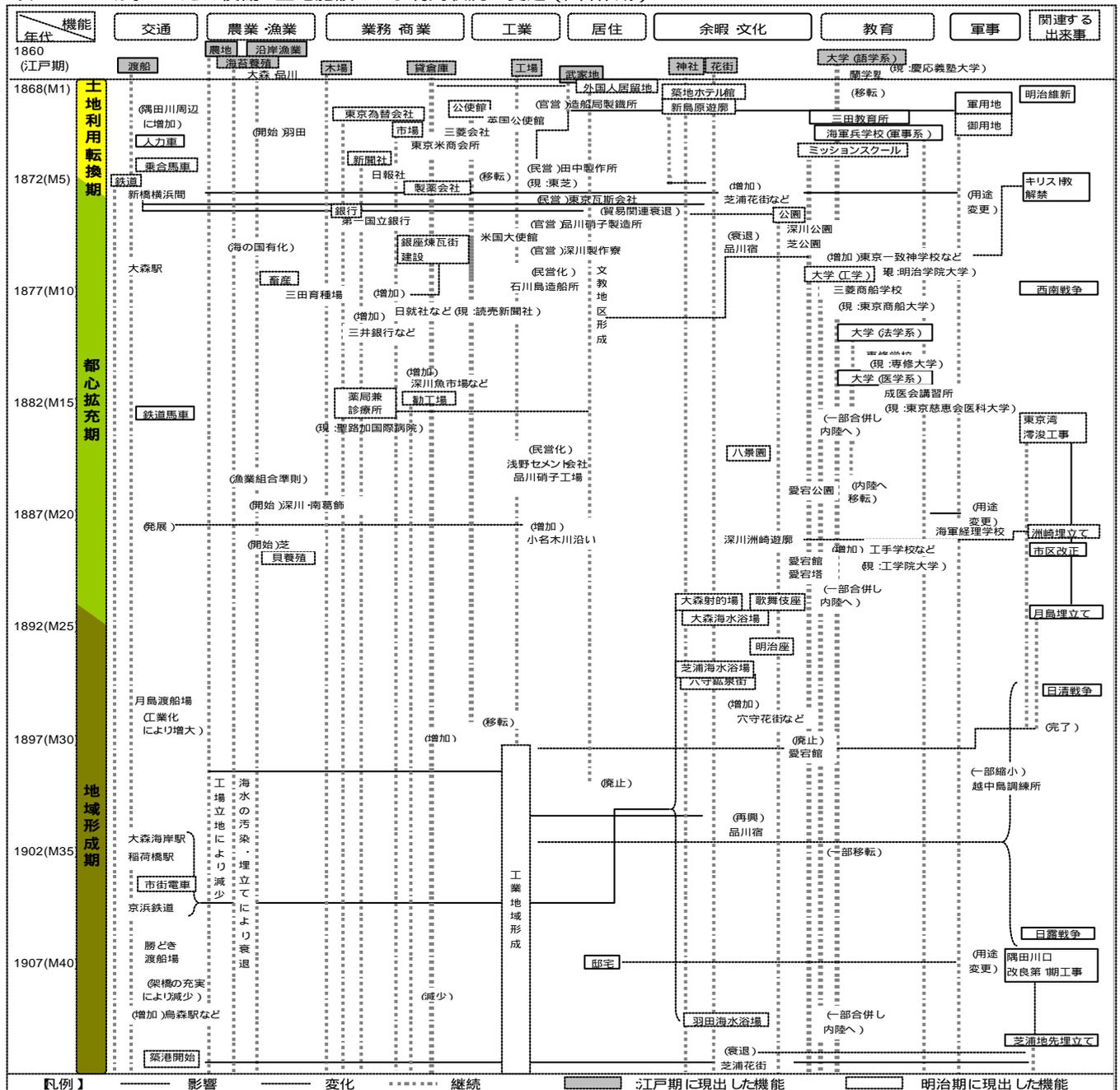
こうして鉄道が敷設されたことに加え、新政府により不燃都市をつくる目的とともに、都市の玄関口として「銀座煉瓦街」が形成された。その周辺は江戸期にも

消費の中心地であったことから、「銀行」「勤工場」⁽³⁾などの業務・商業施設が開設・増加していった。

さらに既述したように、WFは「築地居留地」を中心として異文化の受け入れ先であったが、その地域では西欧の学問や思想を伝えるミッションスクール(「東京一致神学校」等)をはじめ、教育施設も数多く建設された。

図-1・より、この時期の各機能の空間分布状況をみると、日本橋・京橋地域において業務・商業機能が極立って集積したためにさらなる都心を形成していることがわかる。また、この地域は「利用転換期」にも工業が立地していたが、この時期になるとそれらは都心周辺の芝、深川・南葛飾あたりの河川・

表-1 WFが担ってきた役割と立地施設および利用状況の変遷(筆者作成)



【凡例】 影響 変化 継続 江戸期に現出した機能 明治期に現出した機能

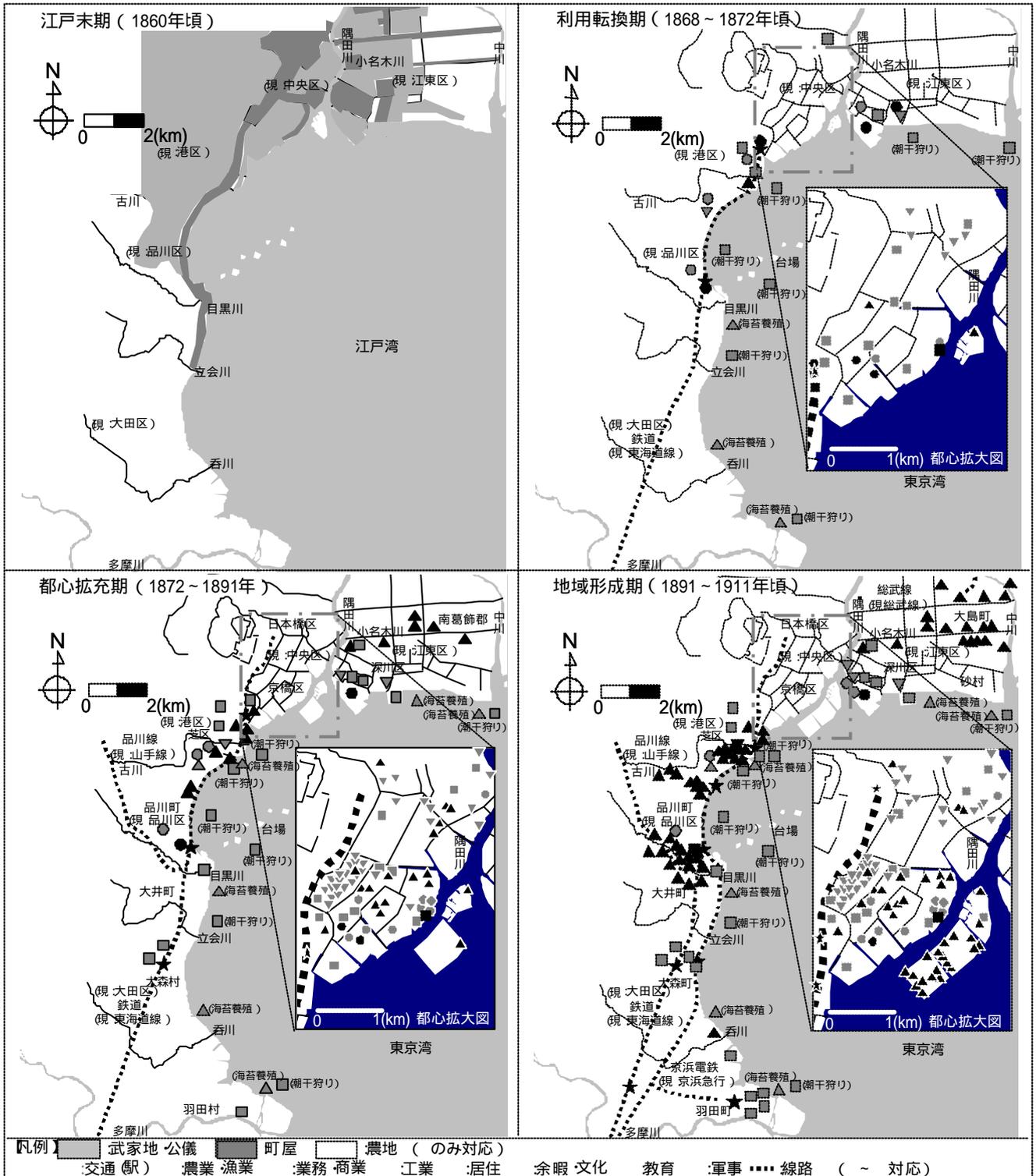


図 - 1 各期の機能の空間分布状況 【分布図筆者作成】



図 - 2 海上に突き出した線路 (高輪付近)⁵⁾
 図中文字は筆者記入】



図 - 3 大森海水浴場⁶⁾

運河沿いにまで波及している。

以上より、この期は日本橋・京橋地域に業務・商業機能が集積したことで都心が形成され、さらにその規模は工業を媒介として徐々に拡大していった。

(3)地域形成期(1891～1911年頃)

前項で述べた都心の外縁に位置する大森地域では、1891(M24)年に小屋がけの脱衣所などの簡単な設備を備えた「大森海水浴場」が開設された⁵⁶⁾(図-3)。これは都心近郊では初めてだったことや付近に東海道線「大森駅」があったことから、『施設が拡充するにつれ活況を呈するようになり、特に明治43年(1910)はもっとも盛んであった』⁵⁷⁾とあるように多くの人が利用していたことがわかる。

図-1・に示すように、この期の空間分布状況を見ると、都心では、工業用地として造成された埋立地の月島・新佃島に工業が集積したことを除くと、機能の分布は都心拡充期と比べ大きな変化はみられない。このことより、都心ではこれまでに現出した機能が定着したといえよう。また、芝・品川や深川・大島⁽⁴⁾等の都心周辺部は「都心拡充期」に比べ、さらに運河・河川沿いに工場が集積して工業地域を形成している。この地域は多くが江戸期には農地であったこと(図-1・)から工業化により拡大したといえる。つまり、都心周辺部はWFの産業を媒介として規模を拡張していったといえよう。

一方、大森・羽田地域の機能の分布状況を見ると、海水浴場をはじめとする余暇施設が集積し、都市のリゾーツ的要素が色濃い空間を形成している。

これらは、大森・羽田あたりは海苔養殖が盛んな地域であり、海の汚染を危惧して工場建設に反対運動があったこと⁵⁸⁾、また日本橋・京橋地域で構成される都心と他の主要都市(横浜)の狭間に位置し、そこに鉄道が整備されたことによりアクセスが容易になったことなどから独自のリゾート産業が形成されたのである。

つまり、この期のWFは都心(日本橋・京橋地域)と都心郊外(大森・羽田地域)において、地域ごとに特化した機能を有し、特有の空間を形成した。

3.まとめ

本研究では明治期全44年間の江戸東京のWFについて分析を行ってきた。その結果、明治期を3期

に区分し、その特徴を明らかにすることができた。

これより、江戸から東京に近代都市へと時代が変貌し始める明治期のWFは、新たに多様な機能を受け入れ土地利用転換が促進された。その後、地域ごとに類似した機能が集積することにより、その機能に特化した独自の地域を確立していき、都心(日本橋・京橋地域)と都心郊外(大森・羽田地域)が形成されるに至った。つまり、明治期のWFは地域の特性を活かし、業務・商業、工業機能が集積する「都心」とリゾート的余暇空間が享受できる「郊外」との二重構造が確立し、発展していった時期であったといえる。

今後は、本稿で捉えた事象が周辺地域にもたらした効用などを明らかにし、それを活かしたまちづくりのあり方を求めることにする。

謝辞
本研究の一部は「平成15年度日本大学学術研究助成金(受領者:岡田智秀)」によるものである。

- 【脚注】
- (1)本研究が対象とする江戸東京の水辺空間は、現在の東京港の範囲とする。これは荒川(旧中川)から多摩川河口までの範囲で、現在の江東・中央・港・品川・大田の5区が該当する。また海岸線から内陸への範囲はまちづくりの中でWFの役割を明らかにするという観点から当時(1911年)の海岸線を有する行政区町村とし、日本橋・京橋・芝・深川の4区と品川町・大井町・大森町・羽田町・砂村の6町村が該当する。
 - (2)軍用地が立地した要因としては水際での防衛と軍艦建造に適していたためとされている⁵⁹⁾。
 - (3)多くの商店が1つの建物に集って種々の商品を陳列・販売した施設。当時の盛り場には1つか2つは立地していたとされる。
 - (4)1889(M22)年に南葛飾郡の39カ村が合併し龜戸村・大島村・砂村となる。

【引用参考文献】

- 1) 東京都港湾局(1992):『東京港史通史編(各論)』
- 2) 地図資料編纂会(1988):『日本近代都市変遷地図集成 5千分の1 江戸-東京市街地地図集成 1657-1895』,柏書房
- 3) 地図資料編纂会(1990):『日本近代都市変遷地図集成 5千分の1 江戸-東京市街地地図集成 1887-1959』,柏書房
- 4) 正井泰夫(2000):『江戸・東京の地図と景観』,古今書院
- 5) 大田区教育委員会(1990):『地図でみる大田区(3)』
- 6) 東京都港区50周年記念事業実行委員会(1991):『東京港 昨日今日あした』,講談社
- 7) 東京都品川区(1973):『品川区史通史編(上巻)(下巻)』
- 8) 東京都大田区(1992):『大田区史(中巻)(下巻)』,大田区史編纂委員会
- 9) 東京都中央区役所(1958):『中央区史(中巻)』,大日本印刷
- 10) 江東区(1995):『江東区史(中巻)』,ぎょうせい
- 11) 東京都港区役所(1960):『港区史(上巻)(下巻)』,勝田印刷
- 12) 東京市芝区役所(1938):『芝区史』,川口印刷所
- 13) 藤田清(1924):『砂町誌』,中央自治研究会
- 14) 藤元昭(1979):『港区の歴史』,名著出版
- 15) 北原進也(1979):『中央区の歴史』,名著出版
- 16) 品川文化財研究会(1979):『品川の歴史』,名著出版
- 17) 東京都港区立三田図書館(1966):『明治の港区』,塚本製作所
- 18) 菅英志(1991):『江戸東京湾事典』,新人物往來社
- 19) 東京都品川教育委員会(1980):『品川の歴史』,太洋
- 20) 新倉善之(1978):『大田区の歴史』,名著出版
- 21) 橋爪隆尚(1908):『羽田誌所初版』,中央社
- 22) 江東区教育委員会社会教育課(1976):『江東区の歴史』,光陽印刷
- 23) 陣内秀信他(1989):『水辺都市 江戸東京のフォーターフロント探索』,朝日新聞社
- 24) 鈴木理生(1999):『東京の地理がわかる事典』,日本実業出版社
- 25) 東京都公文書館(1957):『都市紀要4 築地居留地』,東京都情報連絡室
- 26) 東京都(1961):『都市紀要9 東京の女子教育』,東京都
- 27) 東京都(1963):『都市紀要10 東京の大学』,東京都
- 28) 児玉幸多(1994):『復元・江戸情報地図』,朝日新聞社
- 29) 東京都港区立みなと図書館(1981):『与された港区()』,勝田印刷
- 30) 清水正雄(1998):『東京はじめて物語銀座・築地・明石町』,六花社
- 31) 玉井哲雄(1992):『よみがえる明治の東京』,角川書店
- 32) 藤元昭(1979):『港区の歴史』,東京にふる里をつくる会
- 33) 東京都江戸東京博物館(1998):『図説でみる江戸東京の世界』,東京都歴史文化財団
- 34) 品川区立品川歴史館(2000):『品川歴史館解説シート No.14・15』
- 35) 品川区立品川歴史館(1992):『明治鉄道錦絵とその時代』
- 36) 近藤和吉(1996):『江戸から東京へ』,人文社
- 37) 品川教育委員会(1994):『品川用水溜池から用水へ』,品川教育委員会事務局
- 38) 大田区立郷土博物館(1999):『復刻版 博物館ノート No.51~No.100』
- 39) 大田区立郷土博物館(1994):『工場まちの探検ガイド』
- 40) 大田区立郷土博物館(1993):『大田区 海苔物語』
- 41) 大田区史編纂主任専門委員(1981):『大田区の史話(その1)(その2)』,東京都大田区
- 42) 東京都大田区総務部広報課(1970):『大田区の歩み』,勝田印刷
- 43) 東京都江東区総務部広報秘書室(1983):『江東区のあゆみ』
- 44) 菊池利夫(1974):『東京港史』,大日本図書
- 45) 小本新造(1980):『東京時代 江戸と東京の間』,日本放送出版協会
- 46) 篠原宏(1990):『銀座文化研究 第5号』,銀座文化史学会
- 47) 品川区立品川歴史館(1987):『黒船来航と品川台場』,丹青社
- 48) 小杉雄三(1981):『浜離宮庭園』,東京都公園協会
- 49) 東京都(1972):『東京百年史(第二巻)(第三巻)』
- 50) 清水正雄(1989):『明治17年を中心とした居住者一覧図』,明石資料室
- 51) 初田亨(1994):『東京 都市の明治』,筑摩書房,pp.68-89
- 52) 文献 27)pp.36-79
- 53) 文献 24)p.164
- 54) 文献 49)中巻 p.573
- 55) 文献 28)p.83
- 56) 文献 1)p.1235
- 57) 文献 38)No.87
- 58) 文献 8)中巻 p.229
- 59) 文献 23)p.33